

ヒガ ハワード ケン* 財 部 香 枝** 日本語訳：岡 田 泰 弘***

Howard K. Higa* Kae Takarabe** Japanese translation by Yasuhiro Okada***



ドキュメンタリー『Speaking Truth to Power』への応答： すべての事は互いにつながっている

A reaction to the documentary “Speaking Truth to Power”:
everything is connected to everything

【本稿は、2023年11月29日に行われた国際人間学研究科国際関係学専攻セミナー「米国アフリカ系女性議員から学ぶこと」に参加し、触発された同専攻教員ヒガによる応答論考である。論考に先立ち、セミナーの開催経緯および映画の紹介について、セミナー発案者の財部が備忘録として記す。また、ヒガの論考の日本語訳は岡田が行った。セミナーの詳細および講演内容については、岡田泰弘「米国アフリカ系女性議員から学ぶこと」国際人間学研究科レポート『Glocal』Vol. 24、中部大学大学院国際人間学研究科、2024：6-8を参照されたい。】

序文（財部香枝）

1. 本セミナー開催経緯

2023年10月1日、名古屋国際センターにて、東海ジェンダー研究所の賛助会員の集いに筆者は参加する機会を得た。そこで、映画『権力を恐れず真実をー 米国下院議員バーバラ・リーの闘い』が上映された。映画の事前説明は、本学で非常勤講師を務めておられた柳澤幾美氏により行われた。柳澤氏は、本映画を知り、字幕作成を草の根的に開始したと言う。映画上映会後には、本学人間力創成教育院の岡田泰弘氏の講演会が行われた。岡田氏が字幕監修を無償で引き受けたという事実を知った。さらに、岡田氏の研究室は筆者の研究室の1つ上の階にあるとのことで、縁を感じた次第である。映画の内容に胸を打たれたのと同じくらい、こういった草の根の活動に感銘を受けたこともあり、本学の学生に鑑賞してもらいたい、さらに岡田氏の講演会で、教員や大学院生と自由に議論したいと考え、本セミナーを企画した。

セミナーは、柳澤氏による事前説明、映画上映会、岡田氏の講演、さらに岡田氏、柳澤氏、専攻教員、専攻の大学院生による交流会から構成された。映画上映会の参加者は学生、教職員合わせて計73名に上った。交流会では、羽後静子氏、ケン・ヒガ氏が刺激的なコメントを行うとともに大学院生にエールを送り、大いに盛り上がった。本稿は、この秀逸なコメントから着想を得た論考である。

2. 映画『権力を恐れず真実をー 米国下院議員バーバラ・リーの闘い』について

同映画の英題は、Barbara Lee: Speaking Truth to Power で、アビー・ギンズバーク監督により2020年に制作された83分のドキュメンタリーである。米国議会で2001年9月11日の同時多発テ

*中部大学国際関係学部国際学科 **中部大学国際関係学部国際学科 ***中部大学人間力創成教育院

ロに対する武力行使決議に唯一反対をして有名になった民主党連邦下院議員、バーバラ・リーの長年の力強い民主主義的な政治活動に焦点を定め、人種差別、貧困などの政策課題に取り組み、奮闘する姿を追う。本人のみならず、家族、同僚、支援者、さらには作家アリス・ウォーカーらのインタビューを交えながら、彼女の信条や宗教観まで掘り下げて探ってゆく力強い映画である。

バーバラ・リーは、1966年に結成され70年代まで続いた、黒人解放運動をアメリカで展開したブラックパンサー党でのボランティアからキャリアを開始する。後に1998年の初当選以来、再選を続けるカリフォルニア州ベイエリアを地盤とする民主党の連邦下院議員であり、連邦議会では今日もなお少数派のアフリカ系女性議員である。彼女が、同時多発テロ直後に、軍事的報復一色だったアメリカ社会の中で、なぜ異議を唱えたのか、それを明らかにするために彼女の出生、生い立ちまで遡る。リーは彼女の高校の規則を変えさせて最初の黒人チアリーダーになった。また、家庭内DVを経験し、シングルマザーとして息子を育て、家を購入し、カリフォルニア大学でソーシャルワークの修士号を取得した。人種、ジェンダー、階級などの差別にあいながらも、これらを可能にしたのはまさに公的扶助であった。

岡田氏は「政府が提供する社会福祉制度を活用しながら自立を目指し、自己実現を模索していた人物が、その後政治家になってかつての自分と同じような境遇にある貧しい非白人女性を支援するための政策に取り組み奮闘するという、一人のアフリカ系アメリカ人女性のエンパワーメントの物語としてこの映画をとらえることもできる」と指摘する。

なお、本映画は、DVD化が決定している。

映画公式ホームページ

<https://speakingtruthstopowermovie.com/>

バーバラ・リー議員公式ホームページ

<https://barbaraleeforca.com/meet-barbara/>

論考 ヒガ ハワード ケン（日本語訳：岡田泰弘）

The documentary no doubt left many viewers, especially teachers and students in International Studies, inspired and motivated to try to do more to act on humanitarian issues.

このドキュメンタリー映画を見て多くの視聴者、特に国際学を専攻する教員や学生たちは人道的な問題に対してもっと行動してみようと刺激を受け、意欲を掻き立てられたに違いない。

Whether I could personally live up to the renewed call to action weighed on my mind for days and weeks following the viewing. The documentary for me was both a reminder of where I came from and a reality check for how far we have fallen away from social responsibility.

新たな行動への呼びかけに対して私自身が応えられるかどうかについて、鑑賞後何日も、何週間も心に重くのしかかっていた。私にとってこのドキュメンタリーは、自分がどこから来たのかを思い出させるものであるのと同時に、私たちが社会的責任からどれほど遠ざかってきたのかを現実的に確認させるものでもあった。

In America, Barbara Lee was a generation ahead of me. From the generation of the 60s in America that took up the mantle of striving for humanitarian rights after Martin Luther King was assassinated at the height of his influence. The subsequent generations, including those of us who went to college in the 80s, were often chastised for our lack of human rights activism and acute social awareness by our forerunners.

バーバラ・リーは米国で私より一つ上の世代だ。マーティン・ルーサー・キング牧師が絶頂期に暗殺された後に人道的権利の獲得のために奮闘した、1960年代の米国を経験した世代である。1980年代に大学に進学した私たちを含むその後の世代は、先達から人権活動や鋭い社会認識の欠如をしばしば非難されたものである。

We seemed to make our comeback at a late stage and were championed by the rise of Barack Obama as our statesman--in some ways, for some of us. “Barry” and I are the same age and went to adjacent “brother” high schools in Hawaii, so I admit I was one who was caught up in the fervor of his “hope and change” campaign.

その後、私たちの世代は遅まきながら政治意識に目覚めたようで、中には同世代の政治家であるバラク・オバマの登場によって何らかの刺激を受けた者もいた。「バリー」と私は同じ年で、ハワイで隣接する兄弟校にあたる高校に通っていた。だから、私も彼の「希望と変革」キャンペーンの熱狂の渦に巻き込まれた一人だった。

In short, in my opinion, he wasted valuable time and energy trying to straddle the line of appeasing various sides of the political spectrum in America. Others would say the resistance to the first Black president created insurmountable roadblocks at every turn—which I also agree with. In the end, important inroads were made towards social and humanitarian aims. Those efforts may have fallen short in the opinions of some people.

彼は米国でさまざまな政治的傾向をもつ人々に歩み寄るために、あまりにも多くの時間とエネルギーを費し過ぎたように思う。また、黒人初の大統領に対する抵抗があらゆる場面で乗り越えがたい障壁を生み出したと言う人もいて、私もそれに同意する。一部の人々にとっては不十分であったかもしれないが、オバマの登場によって最終的には社会的、人道的な目標に向かって大きく前進したのも事実である。

In present day America, a combination of a demographic upheaval, the exacerbation of political extremism, and a counter-balance reaction of the political pendulum led to the rise of Donald Trump—of course, many other factors too. The rise of Trump has been a complicated conundrum that is still causing shockwaves across the political and social spectrum with each astonishing twist and turn.

現代の米国では人口動態の激変、政治的過激派の増加、そして政治的振り子の反動などさまざまな要因が重なり、ドナルド・トランプが台頭した。トランプの台頭は複雑な現象であり、驚くような紆余曲折を経ながら、政治的、社会的な立場を越えて今なお衝撃を与え続けている。

For me, this is part of the context that was situated in my consciousness along with my life experiences when I encountered the “gut check” documentary *Speaking Truth to Power*. In addition, I viewed the documentary with students and teachers in our dept. about two weeks before leading a study tour to Hawaii.

The multicultural aspects in Hawaii provided cross-cultural insights for reflection on the film.

これは私がドキュメンタリー映画『権力を恐れず真実を』に出会い、自分自身を振り返るきっかけを与えられたときに、私の人生経験とともに意識することになった社会背景の一部である。また、私がこのドキュメンタリーを本学部の学生や教員たちと鑑賞したのは、ハワイでの海外研修の引率に向けて出発する2週間ほど前のことで、ハワイの多文化性を意識することで映画に関する異文化論的な考察が可能となった。

Several themes stood out for me as I contemplated feelings of self-doubt, inspiration, regret, and wonderment following viewing the film. I will limit myself to 5 of them since space is limited and 5 seems a convenient number.

映画を観た後に私が感じた自信喪失、インスピレーション、後悔、驚きといった感情について振り返ったとき、いくつかのテーマが私の前に現れた。字数の制約と切りの良い数字であることから、以下5つの点に絞って論じたい。

1. Everything is connected to everything.

I was reminded that “everything is connected to everything”, especially along the arc of humanitarian progression. In other words, acts of humanitarianism do not occur piecemeal. America’s humanitarian journey included many milestones along the way, all of which paved the way for subsequent steps along this journey.

1. すべての事は互いにつながっている

このドキュメンタリーを見て、特に人道的な進歩の過程において、「すべての事は互いにつながっている」ことを再認識するに至った。つまり、人道的な行為は断片的に起こるものではないということだ。米国における人道的実践の流れには多くの画期的な出来事があり、すべてがその先の歩みへと続く道を切り開いたのである。

In other words, it was necessary for American society to traverse various social struggles in order to cultivate a humanitarian spirit and a tolerance and acceptance in wide American society for the consideration of the next steps along the humanitarian journey. Of course, I am not suggesting that the journey is linear and there are no setbacks. (The reversal of Roe v. Wade and abortion rights in Americas is one example.)

言い換えれば、人道的実践の流れの中で新たな一歩を踏み出すことを考え、米国社会に幅広く人道主義的な精神と寛容性や受容性を涵養するためには、さまざまな社会的闘争を展開することが必要だった。もちろん、その道程が一直線なものでも挫折がないと言っているわけではない（米国で妊娠中絶の権利を保障したロー対ウェイド判決が覆されたのは、その一例である）。

But I am suggesting that it is not easy for societies to face big steps along the humanitarian arc when the foundational stages have not been traversed.

しかし私が言いたいのは、基礎的な段階を踏んでいない社会が人道的実践において大きな進歩を遂げるのは容易ではないということだ。

Even the fact that Barbara Lee is a female who almost single-handedly led the resistance to authorizing “unrestrained” military action in Afghanistan following 9-11 is indicative of the progression of humanitarian arc. Women leading humanitarian efforts and serving in positions of power and influence have become rather normalized in American society.

バーバラ・リーが、9.11直後のアフガニスタンに対する「無制限の」軍事行動を許可することへの抵抗をほぼ独力で主導した女性であるという事実でさえ、人道的な進歩を示している。女性が人道的な活動を主導し、権力や影響力のある地位に就くことは、米国社会ではむしろ常態化しているからである。

In the current presidential election in the US, females seem poised to lead America beyond the octogenarian duo of Trump and Biden. On the GOP side, Niki Haley was Trump’s primary challenger. Though she was not successful in defeating Trump, many feel she is the future of the Republican Party (Kamarck, 2024). Also, speculation about Trump’s choice for a VP running mate included several prominent females from American politics. On the Democratic side, Kamala Harris remained Biden’s VP running mate. (It is also notable that Haley is of Indian descent and Harris is of Jamaican and Indian descent. Also, Tulsi Gabbard, who some considered a possible Trump VP pick, is of Samoan descent and the first Hindu member of Congress.)

今回の米国大統領選挙では、トランプとバイデンという80歳のコンビを脇に置いて、女性が米国をリードする態勢が整いつつあるようだ。共和党の予備選挙では、ニッキー・ヘイリーがトランプに対する挑戦者だった。トランプを破ることはできなかったが、彼女に共和党の未来を感じている人は多い（Kamarck, 2024）。また、トランプが選ぶ副大統領候補には、米国政界の著名な女性たちが何人も含まれていた。民主党側では、カマラ・ハリスがバイデンの副大統領候補として残った（ヘイリーがインド系、ハリスがジャマイカ系とインド系のルーツを持つことにも注目すべきだ。また、トランプが副大統領候補に指名する可能性があると言われていたトゥルシー・ギャバードはサモア系で、米国議会初のヒンドゥー教徒である）。

On our study trip to Hawaii by our students in International Studies, we had an opportunity to discuss international affairs with the Mayor of Honolulu, Rick Blangiardi. Students and teachers were surprised to learn that nearly half of the current Honolulu City Council members are female. In our interaction with a cohort of graduate school researchers in the Engineering Dept. at the University of Hawaii, we were also surprised to meet a stand out female student leading the research group.

国際関係学部の学生たちが参加したハワイ研修では、ホノルルのリック・ブランジアルディ市長と国際情勢について話し合う機会があった。現職のホノルル市議会議員の半数近くが女性であることに、学生も教員も衝撃を受けた。また、ハワイ大学工学部の大学院研究者との交流では、研究チームを率いる優秀な女子学生との驚きの出会いもあった。

From across the political and professional spectrum in the US, important work needs to be done. It makes sense that the best and brightest are offered opportunities to serve and lead in various positions. If they happen to be women, they should be given equal opportunity. There are still obstacles to equal opportunity

for women in America, but the differences between societies that have traversed the steps along the humanitarian arc can be marked.

米国では政治的、職業的な立場を問わず、行うべき重要な仕事がある。最も優秀な人材がさまざまな役職に就き、リーダーシップを発揮する機会を与えることは理にかなっている。それがたまたま女性であったとしても、彼女たちに平等な機会が与えられるべきである。米国における女性の機会均等にはまだ障壁があるが、人道的実践をしてきたかにより、社会においてその違いが顕著に表れている。

2. Relying on your “superpower”.

The documentary reminded me of the depth of personal sacrifice and internal fortitude that is required to speak truth to power in many situations. In many instances, Barbara Lee and the leaders that were highlighted in the documentary relied on their “superpower”.

2. 自分のもつ「大きな内なる力」に頼ること

このドキュメンタリーを見て、多くの状況で権力に対して真実を語るために必要な個人的犠牲の深さと、内なる不屈の精神に気づかされた。多くの場合、バーバラ・リーやドキュメンタリーで取り上げられた指導者たちは、自分たちがもつ「大きな内なる力」を頼りにしていた。

It struck me that many were deeply religious. The struggles they endured were so severe that they were driven and supported by their faith in their Gods and religions. From Barbara Lee to Martin Luther King to Mahatma Gandhi to Nelson Mandela--they relied on a humanitarian calling that aligned with a religious calling which led to martyrdom for some of them.

多くの人々が深い信仰心を抱いていることが印象的だった。彼らが耐えた苦闘は非常に厳しいものであったので、神々や宗教への信仰によって自らを駆り立て、支えていた。バーバラ・リーからマーティン・ルーサー・キング、マハトマ・ガンジー、ネルソン・マンデラに至るまで、彼らは宗教的使命感と一致する人道的使命感に頼っており、その結果として殉教する者もいた。

King called the principle of nonviolent resistance the “guiding light of our movement. Christ furnished the spirit and motivation while Gandhi furnished the method” (King, 1960).

キングは非暴力抵抗の原則を「私たちの運動を照らすための指針」と呼んだ。「キリストは精神と動機を与え、ガンジーは方法を与えたのだ」(King, 1960)。

Additionally, they turned personal struggle, including poverty and a lack of opportunity, into a strength. They harnessed the extreme challenges they endured and overcame in their early lives, and turned them into their personal superpower, step by step, forging a temperament and internal fortitude that allowed them to persevere through extreme conditions and situations along their humanitarian journey.

さらに、彼らは貧困や機会の欠如などの個人的な苦境を力に変えたのだった。彼らは幼少期に耐え、克服した極限の試練を生かして、自分自身の大きな内なる力に変えた。そして、人道的実践を遂行していく中で極限の状態や状況を耐え忍ぶことを可能にする気質と、内なる不屈の精神を徐々に鍛え上げていったのだ。

Watching the documentary among the young students in the audience at our university, I wondered what we could glean from these nuances of these implausible personal qualities that Barbara Lee and others displayed. I felt turning weakness into a strength does not need to be on such a grand scale in order to be impactful. For example, it struck me that the graduate students from foreign countries who were in attendance at the viewing were experiencing various struggles living and studying in Japan. I felt their struggles would indeed teach them important life lessons and provide them various insights and tools for life. It is the same with the young Japanese students I meet in my classes. Turning weakness into strength was personified on a grand scale in the documentary, but it was a reminder that if you believe in yourself, you can eventually turn “your truth” into power—your superpower.

本学の若い学生たちに混じってこのドキュメンタリーを見ながら、バーバラ・リーらが示した信じがたい個人的資質の特徴から、私たちは何を読み取ることができるのだろうかと考えた。弱さを強さに変えることは、それが影響力をもつためにはそれほど壮大なスケールである必要はない。例えば、会場に来ていた大学院の留学生たちは、日本での生活や研究で様々な苦勞をしている印象を受けた。その苦勞は、彼らに人生に大切な教訓を与え、さまざまな気づきや生きるための手段を与えてくれるに違いない。それは私が授業で出会う日本の若い学生たちも同じだ。ドキュメンタリーの中では、弱さを強さに変えることが壮大なスケールで擬人化されていたが、それにより自分を信じていればやがて「自分にとっての真実」を力に、つまりあなた自身の大きな内なる力に変えることができるのだということに気づかされた。

3. Calculated risks.

However, at the same time, I also recognized and contemplated the risks of taking grand and bold steps related to speaking truth to power.

3. 計算されたリスク

しかし同時に、権力に対して真実を語るという壮大で大胆な一歩を踏むことに秘められたリスクについても認識し、考える必要がある。

I wondered about the many “Barbara Lees” that “spoke truth to power” in many arenas around the world, including in the US and Japan, that were never heard of again because they were diminished, silenced, or worse.

私は米国や日本を含む世界中の多くの舞台で「権力に対して真実を語った」多くの「バーバラ・リーたち」のことを考えたが、その声は貶められたり、沈黙させられたり、もっとひどい理由のために決して聞かれることはなかったのである。

I wondered how the fine line between “speaking truth to power” and being silenced and sidelined forever can be easily straddled. It would have served no purpose for the greater good and end goal, if leaders like Barbara Lee, MLK, etc. were silenced forever. In fact, in the documentary, Barbara Lee came very close to being an insignificant footnote in history. She almost completely lost her political career, her voice for social issues, and her standing in society. And it literally took decades for Barbara Lee to be vindicated for

her extremely daring and bold stand against “the war on terror”. Her level of self-belief through it all was beyond impressive.

「権力に対して真実を語る」ことと、沈黙させられ、永遠に傍観されることの間の微妙な境界線をどのように越えることができるのだろうか。バーバラ・リーやキング牧師のような指導者が永遠に沈黙させられていたとすれば、それはより大きな正義と最終的な目標の実現のためには何の役にも立たなかつただろう。実際にドキュメンタリーの中では、バーバラ・リーは歴史の中で取るに足らない存在になりかけていた。彼女は政治家としてのキャリア、社会問題に対する発言力、社会的地位をほとんど完全に失ってしまっていた。そして、バーバラ・リーの対テロ戦争に反対する極めて大胆かつ勇敢な立場が正当化されるまでには、文字通り十数年を要した。それを乗り越えた彼女の信念の強さに感動を禁じ得なかつた。

How impossible it must be to speak truth to power in non-democratic counties. I wondered if Navalny’s incredibly bold decision to return to Russia to speak his truth to power cost him not only his life but also a chance for greater impact (Lawrence, 2024).

非民主主義国家で権力に対して真実を語るのは、どれほど不可能なことだろうか。権力に対して真実を語るためにロシアに戻るといふ、アレクセイ・ナワリヌイの信じられないほど大胆な決断は、彼の命だけでなく、より大きな影響を与えるチャンスをも犠牲にしたのではないか (Lawrence, 2024)。

These are the risks inherent in speaking truth to power.

これらは権力に対して真実を語ることに秘められたリスクである。

Congressman John Lewis, who was featured in the documentary has often spoken about his concept of “getting into good trouble” within non-violent civil disobedience. In 2018, John Lewis wrote on his personal Twitter account: “Do not get lost in a sea of despair. Be hopeful, be optimistic. Our struggle is not the struggle of a day, a week, a month, or a year, it is a struggle of a lifetime. Never, ever be afraid to make some noise and get in good trouble, necessary trouble.” (Weaver, 2020).

このドキュメンタリーに登場したジョン・ルイス下院議員は、非暴力的な市民的不服従の中で「良いトラブルに巻き込まれる」という自身の考えについてしばしば語っている。2018年、ルイスはツイッターの個人アカウントに以下のように書き込んでいた。「絶望の海に迷い込んではいけない。希望を持ち、楽観的であれ。私たちの闘いは1日、1週間、1カ月、1年の闘いではなく、一生の闘いだ。決して騒ぎを起こし、良いトラブル、必要なトラブルに巻き込まれることを恐れてはならない」(Weaver, 2020)。

This was his way of straddling the line of speaking truth to power and being silenced. It worked for him; but it is not for all.

これは権力に対して真実を語ることと、沈黙させられることの境界線を越えるために彼が採った方法だった。それは彼にとっては有効であったが、すべての人に当てはまるとは限らない。

I wondered why no one dared speak truth to power to save all of the young boys who were victimized by the founder of the Johnnies group over many decades. There are many instances of cowering in the face of power throughout the world and throughout history.

何十年もの間、ジャニーズ事務所の創始者の犠牲となったすべての少年たちを救うために、なぜ誰も権力に対して真実を語る勇気がなかったのだろうか。権力に屈した例は古今東西を問わず、枚挙にいとまがないのだが。

Even in workplace situations. When speaking truth to power can be career-ending, people often strive to live another day, holding onto the solace of the “truth” that resides within them, especially when they have a family to provide for. It can be a lonely struggle but one that will take more time. But it may be better to speak up at some point if others can be protected and the overall good can be championed and advanced. Because everything is connected to everything.

職場においてさえそうである。権力に対して真実を語ることがキャリアを終わらせることになりかねない場合、人々はしばしば、特に養うべき家族がある場合には、自分の中にある「真実」という慰めにしがみつ きながら、日々を生きようと努力する。それは孤独な闘いかもしれないが、もっと時間がかかるものだ。しかし、他の人々が守られ、社会全体の幸福が増すのであれば、ある時点で声を上げるべきかもしれない。すべての事は互いにつながっているのだから。

4. The abandonment of “truth” in the concept of speaking truth to power.

The backdrop and context to the documentary (the movements of the 60s) provided a stark contrast to the current US socio-political situations in many ways. What is unfurling now in America, in the so-called beacon of modern democracy, is astonishing. For example, the reluctance of sitting American politicians to speak truth to power regarding the antics, behavior, political stances, and crimes of Donald Trump, during his presidency and as a candidate for re-election is unprecedented.

4. 権力に対して真実を語ることにける「真実」の放棄

このドキュメンタリーの背景と文脈（1960年代の運動）は、多くの点で現在の米国の社会政治的な状況とは対照的である。近代民主主義の灯台と呼ばれる米国で、現在繰り広げられている事態は驚くべきことだ。例えば、ドナルド・トランプの大統領在任中および再選候補者としてのふてぶてしい態度、行動、政治的スタンス、犯罪について、米国の現職政治家たちが権力に対して真実を語ろうとしないのは前代未聞の事態である。

Political scientists have struggled to rationalize these adverse reactions to humanitarianism, the truth, and power.

政治学者たちは人道主義、真実、権力に対するこのような副作用を合理的に説明しようと苦心してきた。

It is a complicated social phenomenon and dilemma in America. Explanations have ranged from the charisma of Donald Trump to influence others like a cult figure (Hassan, 2020; Reyes, 2020). To the fear

of retribution—actual physical harm to self and family—by fringe elements of the MAGA movement, who own guns, who make violent threats, and who have engaged in aggravated assaults as witnessed in the Jan. 6 attacks on the US Capitol (Altheide, 2021; Barnett, 2024). To this end, former Presidential candidate Mitt Romney, an outspoken critic of Trump, stated that he knows that non-senior members of Congress cannot afford the \$5,000 he spends a day on protective services (Goldberg, 2023). The threats are real and so are the costs of self-protection.

それは米国では複雑な社会現象であり、ジレンマでもある。カルト集団の指導者のように他者に影響を与えるドナルド・トランプのカリスマ性から (Hassan, 2020; Reyes, 2020)、MAGA (米国を再び偉大にする) 運動の過激派が自分や家族に危害を加えて報復することへの恐れまで、さまざまな説明がなされている。実際に彼らは銃を所有し、暴力的な脅迫を行い、2021年1月6日の連邦議事堂襲撃事件で見られたような加重暴行を行ったのだ (Altheide, 2021)。このため、トランプを露骨に批判している元大統領候補のミット・ロムニーは、上級議員でない議員は1日5,000ドルの警護費を払う余裕がないことをわかっているのだと述べた (Goldberg, 2023)。そのような脅威は現実存在し、自己防衛のための費用もまたそうである。

The abandonment of the truth is also a factor of team politics in the US, the swinging of the political pendulum from one side to the other with each presidential cycle, and the influence of the internet to foster and solidify one-sided and extreme beliefs and stances.

真実の放棄は、米国における極端に党派的な政治の要因にもなっている。それにより大統領選の周期ごとに政治の振り子が左右に揺れ動き、さらにはインターネットの影響力が一面的で極端な信念や姿勢を助長し、強固なものにしている。

These are complicated and deep discussions. For lack of space, I table them here for consideration at face value. Suffice it to say, that despite living in an age when our phones are virtually supercomputers with access to instant and unlimited information in an unprecedented way in the history of mankind, the “truth” and facts, quite ironically, for many topics and beliefs, have become fleeting.

これについては複雑で深い議論を要するが、スペースの都合上ここでは額面通りに考察するにとどめる。あえて言うなら、携帯電話が事実上スーパーコンピューターとなり、人類史上かつてない方法で瞬時に無制限の情報にアクセスできる時代に私たちは生きているにもかかわらず、皮肉なことに、多くの話題や信条にとって「真実」や事実は儚いものとなっているのだ。

The influence of the algorithm connected to internet searches has shown to keep internet users occupied and engaged through sending users material that aligns with their personal affinities, ideologies, and interests (Kordzadeh, 2022).

インターネット検索に関連するアルゴリズムの影響力により、ユーザーの個人的な好み、イデオロギー、興味に沿ったコンテンツを送ることで、ネットユーザーを飽きさせず、夢中にさせることがわかっている (Kordzadeh, 2022)。

This coupled with biased news coverage from major news outlets that cater to specific viewership has resulted in an indoctrination of extreme and unbalanced information and news on the ultra-conservative and ultra-liberal political spectrum in the US, setting up a wide chasm of political ideology across the US.

このことが、特定の視聴者に向けて発信される大手報道機関の偏向報道と相まって、米国の超保守的、超リベラルな政治的傾向に関する極端で偏った情報やニュースを教え込む結果となり、米国全体に政治的イデオロギーの大きな分断が生じている。

The ultimate irony here is that the Jan. 6 US Capitol rioters genuinely believed they were “speaking their truth to power”, i.e., standing up for justice and the truth.

ここでの究極の皮肉は、1月6日の連邦議事堂襲撃事件の参加者たちが、自分たちが「権力に対して自分たちの真実を語っている」、すなわち正義と真実のために立ち上がっていると純粋に信じていたことだ。

From now, these factors and the looming effects of AI will continue to cause the truth to be subject to interpretation, disagreement, and manipulation.

これから先も、こうした要因や迫り来る AI の影響によって、真実は解釈、意見の相違、操作の対象となり続けるだろう。

5. Final thoughts: a matter of the heart.

Speaking truth to power can be in the eye of the beholder and according to one’s position along the journey of the arc of humanitarianism—personally or as a society.

5. 最後に一心の問題

権力に対して真実を語ることの意味合いは人によって異なるのであり、人道的実践の流れの中で、個人あるいは社会として、どの立場にいるのかによっても変わる。

I am reminded of the comments of Hirotada Ototake in his book “No One’s Perfect” (五体不満足, Gotai Fumanzoku, 2003) regarding cultivating compassion and empathy along the journey of the humanitarian arc. His book focused on the barrier-free movement of the 2000s in Japan, a movement to make societies more accessible to citizens with disabilities. Ototake suggested starting with creating “barrier-free hearts”. He dedicated a section of his book to this important theme.

乙武洋匡が著書『五体不満足』(1998年)の中で、人道的実践の流れの中で思いやりと共感を培うことについて述べた言葉を私は思い出す。この本は障害を持つ市民にとって社会をよりアクセスしやすいものにするため、2000年代に日本で行われたバリアフリー運動に焦点を当てたものである。乙武は「バリアフリーの心」を作ることから始めるよう提案し、著書の一節をこの重要なテーマに捧げた。

Matters of humanitarianism are afforded us every day. Being honest, doing what is right, saying hello to a fellow student who has no friends, treating all people we meet as equal, etc., etc. Step by step they may lead

to bolder and more impactful endeavors and stances along the journey. In the documentary, we observed and celebrated the greatness that was cultivated and achieved along the lifetime journeys of revered civil rights leaders in America. But I am reminded that they started where many of us are and they shone the light on what is possible—for them and for us, in our own space and time, should we choose to traverse steps along the journey.

人道主義に関する問題に私たちは日々関係している。正直であること、正しいことをすること、友だちのいない仲間に声をかけること、出会う人すべてに平等に接することなどなど。このような行為は旅の途中で一歩ずつ、より大胆で影響力のある取り組みや姿勢につながるかもしれない。ドキュメンタリーの中で、私たちは米国の尊敬すべき公民権運動の指導者たちが生涯の旅路の中で培い、達成した偉大さを目の当たりにし、賞賛した。しかし、実際には彼らは私たちの多くがいるところから自分たちの活動を始めたのである。そして、もし私たちがその旅路の一歩を踏み出すことを選択しさえすれば、彼らでも私たちでも、自分たちがいる空間と時間で取り組めるようなことに目を向けたのである。

Returning to the opening premise of this commentary—the documentary caused me to ponder where I came from and where I have gone, along this journey and arc of humanitarianism. In this light, my recent study trip that I led to Hawaii connected to my first study trip that I led to Hawaii.

この解説の冒頭で掲げた前提に戻ると、このドキュメンタリーは人道的実践の流れの中で、自分がどこから来て、どこへ行ったのかを考えさせるものだった。そう考えると、最近私が引率したハワイへの海外研修は、私が最初に引率したものと確かにつながっているのだ。

Years ago, I was teaching in a Dept. of Social Work at a university in Japan. I led a group of 16 students and two teachers on an in-depth study trip to the University of Hawaii and social work agencies in Hawaii. At that time, a graduate student in the Nursing Dept. at the University of Hawaii relayed the following story about taking a final exam for one of her courses in Nursing.

数年前に私が日本のある大学の社会福祉学科で教えていたとき、16人の学生と2人の教員から成るグループによる、ハワイ大学とハワイの社会福祉機関を訪問するための海外研修の引率をした。そこで出会ったハワイ大学看護学部の大学院生が、看護学のある科目の期末試験について次のような話をしてくれた。

She said she had studied fairly well and was able to answer all of the questions on the exam until she encountered the final question on the exam: “What is the name of the janitor that cleans our classroom every week?” After the exam, she said she approached her professor and asked if the final question was a real exam question and would be counted toward the exam score. The professor answered: “Yes, it will. In your field (of nursing) people will come in and out of your life in many different ways. It is important for your work and position to acknowledge and appreciate all of them.”

彼女はかなりよく勉強して、試験のすべての問題に答えることができたという。ただし、「毎週教室を掃除してくれる用務員さんの名前は何ですか？」という試験の最終問題に出くわすまでは。

試験後、彼女は教授の元に駆け寄り、最終問題は本当の試験問題で、試験の得点にカウントされるのかを尋ねたという。教授はこのように答えた。「そうです。あなたの分野（看護）では、人々がさまざまな形であなたの人生に出入りします。そのすべての人を認め、感謝することが、あなたの仕事と立場にとって重要なのです。」

(It is a lesson that many of us took to heart. But, of course, I am not suggesting that such a question would be a proper question on an exam in Japan or elsewhere. There are certainly different approaches and steps that can be taken. In fact, my colleague on the trip questioned the premise and purpose of the story that was relayed to us. It was the approach taken by a professor in Nursing at the University of Hawaii at the time.)

（これは私たちの多くが心に留めた教訓である。もちろん、このような問題が日本や他の国の試験でも適切なものであると言っているわけではなく、異なる方法や手段があるのも確かだ。実際、研修に同行した私の同僚は、その話の前提や目的に疑問を抱いたのだった。これはあくまでもその当時、ハワイ大学の看護学部の某教授が採った方法である）。

Similarly, one of the professors in the TESL Dept. (Teaching English as a Second Language) instructed his students to sign up for lessons for a language that was totally new to them. Over the ensuing weeks of the TESL course, he inquired about the situations his students faced in the language courses. Over a short time, the students bemoaned their struggles of feeling belittled, lost, and overwhelmed. The professor then relayed his teaching point and life lesson at that point: “Never forget this feeling. It is what your students will go through.” It is a life lesson and professional teaching point that has remained core to my approaches as a language teacher.

同様に、TESL（第二言語としての英語教授法）学科のある教授は、学生たちにまったく馴染みのない言語の授業を履修するように指示した。TESL コースの数週間にわたり、教授は学生が語学の授業で直面していた状況について質問した。学生たちは即座に、自分たちが軽蔑され、自信を喪失し、打ちのめされていることを嘆いた。そして教授は、その時の重要な指導事項と人生の教訓を以下のように伝えた。「この気持ちを決して忘れてはなりません。これは語学教師としての私の方法論の核心であり続ける人生の教訓であり、専門的にも重要な指導事項なのです。」

(Related to a different aspect, my mentor and Director of Studies for my degree in International Studies, Prof. Mike Featherstone in the UK, sometimes reminded me that it is better for my research and data of my specific focus to be relayed and disseminated in strategic and careful steps. Certain bold steps, in his opinion, would be counterproductive to the overall purpose and goals of my research.)

（話は変わるが、私の恩師であり、国際学専攻の研究科長であった英国のマイク・フェザーストン教授は、私の研究と私が特に焦点を当てたデータは、戦略的に慎重に段階を踏んで伝え、広めた方がよいと時々私に念を押した。彼の意見では、ある種の大胆な方法は、私の研究の全体的な目的と目標にとっては逆効果になるということだ）。

These are some of the steps that I reflected upon connected to the documentary “Speaking Truth to Power”.

これらはドキュメンタリー映画『権力を恐れず真実を』を通して振り返ることになった、私自身の歩みのごく一部である。

These are some of the small steps that can make a difference in the lives of the people we encounter on a daily basis and meet along our journeys. These are the small steps that Barbara Lee took to cultivate her rise from a youth from an extremely poverty-stricken community who had an extreme fear of public speaking to one of the greatest humanitarian voices of our time. These are the steps that are precursors aligned with the current SDGs movement. SDGs, in my opinion, is an attempt to quantify and measure some of the steps along the humanitarian arc. But the attainment of points and scores toward the goals falls short if actions lack the ideals and cultivation of the barrier-free hearts that Ototake speaks of.

これらは私たちが日常的に出会い、旅の途中で出会う人々の人生に変化をもたらすことができる小さな取り組みのほんの一部である。これらはバーバラ・リーが、人前で話すことを極度に恐れていた極貧地域出身の若者から、現代における最も偉大な人道主義者の一人へと成長するために踏み出した小さな一歩である。これらは現在の SDGs 運動にも繋がる取り組みであるが、私に言わせれば、SDGs とは人道的実践のいくつかを数値化し、測定しようとする試みにすぎない。しかし、乙武が語るような理想や心のバリアフリーの育成を欠いた行動では、目標に向けた点数や得点の達成はおぼつかないだろう。

These small steps do speak truth to power because everything is connected to everything, especially along the personal and societal journeys of the humanitarian arc.

こうした小さな一歩こそが、権力に対して真実を語りかけるのだ。なぜなら、特に人道主義をめぐる個人的、社会的実践の流れにおいては、すべての事が互いにつながっているのだから。

【参考文献】

- Altheide, D. L. (2021). Emotions and the politics of fear: 9/11, Trump, and the pandemic. In *Routledge International Handbook of Emotions and Media* (pp. 212-226). Routledge.
- Barnett E., & Frankel, J. (2024, March 17). Trump says there will be a “bloodbath” if he loses the election. CBS News.
- Dyson, M. E. (2000). *I may not get there with you: The true Martin Luther King, Jr* (Vol. 233). Simon and Schuster.
- Goldberg, M. (2023, Sept. 14). Mitt Romney’s Tragic Ambivalence, *The New York Times*.
- Hassan, S. (2020). *The cult of trump: A leading cult expert explains how the president uses mind control*. Free Press.
- Kamarck, E. (2024, January 24). Four reasons why Nikki Haley may be staying in the race for the Republican party. *Brookings*.
- King Jr, M. L. (2023). *The Papers of Martin Luther King, Jr., Volume V: Threshold of a New Decade, January 1959–December 1960* (Vol. 5). Univ of California Press.
- Kordzadeh, N., & Ghasemaghahi, M. (2022). Algorithmic bias: review, synthesis, and future research directions. *European Journal of Information Systems*, 31(3), 388-409.
- Ototake, H. (2003). *No One’s Perfect*. Kodansha.
- Reyes, A. (2020). I, Trump: The cult of personality, anti-intellectualism and the Post-Truth era. *Journal of language and politics*, 19(6), 869-892.
- Weaver, C. (2020, July 20). Getting in “Good Trouble:” American Civil Rights Leader John Lewis Remembered. *Voice of America*.